



略 歴

1938年(昭13)12月6日 東京・千代田区生まれ
群馬県立高崎高等学校、東京教育大学卒。
現役時代は、スタンドオフとして、東京教育大では
関東大学対抗戦グループ、卒業後はドットウェル
Co.,Ltdに所属しながら関東社会人1部リーグで活躍。
1969年 エリスクラブ韓国遠征の主将を務めたあと、
プレーヤーを引退。その後、日本協会公認レフリーと
して、日本協会主要試合および国際試合のトップレフ
リーとして活躍。日本協会レフリー委員長を歴任。
1992年 日本協会理事に就任以降、会計役、専務理
事、副会長を歴任し、ラグビーワールドカップ2019日
本招致委員会委員長として招致を成功させる。
2012年 ラグビーワールドカップ2019組織委員会理事
2018年 ラグビーワールドカップ2019組織委員会エグ
ゼクティブアドバイザーを歴任。長年に渡り、日本ラグ
ビー普及発展に力を注ぐ。

ラグビー界経歴

1954年	群馬県立高崎高校入学 高校時代のポジションはセンター
1957年	東京教育大学入学 大学時代のポジションはスタンドオフ
1981年	関東協会理事、その後、会計役・書記長に就任
1992年	日本協会理事に就任
2001年	日本協会理事・会計役に就任
2002年	日本協会専務理事に就任 財団法人日本オリンピック委員会 評議員に就任 財団法人日本体育協会 評議員に就任 ジャパンラグビー トップリーグ 初代チェアマン
2004年	ラグビーワールドカップ招致委員会委員長に就任
2005年	日本協会副会長兼専務理事に就任 一般社団法人日本トップリーグ連携機構 副専務理事に就任
2007年	アジアラグビーフットボール協会理事 World Rugby (ワールドラグビー【世界ラグビー機構】)理事に就任
2011年	日本協会副会長に専任
2012年	ラグビーワールドカップ2019組織委員会 理事に就任
2013年	日本協会顧問に就任
2018年	ラグビーワールドカップ2019組織委員会 エグゼクティブアドバイザー
2020年	日本協会会長特別補佐に就任

受 賞 歴

2012年	アジアラグビーフットボール協会 Carlson Lin' Match Officiating Award 受賞
2022年	秋の叙勲における旭日小綬章受章

著 書

2024年7月25日に自著「ラグビーと生きる ノビーと呼ばれた男のW杯招致回顧録」発行。



眞下昇氏を偲ぶ

2025年 6月 28日



眞下さんを偲び(経歴解説)

日本ラグビー協会の副会長、専務理事を歴任し、熱狂に包まれた2019年ワールドカップ(W杯)日本大会の招致に尽力した眞下昇さんは、まさにラグビーと共に生きた人生だった。幼少期の東京大空襲を機に群馬県へ移住し、楯円球と出会った高崎高校で国体優勝、全国高校大会ベスト4を経験。東京教育大(現筑波大)を経て社会人でもプレーし、31歳で選手引退後はトップレフェリーとして1987年の「雪の早明戦」など数々の名勝負で54歳まで500試合近く笛を吹いた。一見強面だが、義理人情に厚く、面倒見がいい親分肌。「体を張ってぶれずに闘う」という原点のラグビー精神をモットーに、86歳までスポーツ界を颯爽と駆け抜けた。

生前、よく口にしていたのが「負けてたまるか」と逆境に立ち向かったW杯招致の軌跡だった。2003年、当時は「無謀な夢」とも言われたW杯の日本招致を自ら打ち上げ、欧州や南半球の伝統国が君臨する閉鎖的な国際ラグビー界の壁に挑戦。競技のグローバル化を訴え、投票権を持つ国際ラグビーボード(IRB・現ワールドラグビー)の理事たちの懷に飛び込もうと、世界各国を駆け回った。

当初は挫折の連続だったが、昇の名前にちなんで「ノビー」の愛称で親しまれ、フランスのセース川に浮かぶ船の上で「カラオケ外交」しながらエルビス・プレスリーなどの曲を熱唱して人脈を深めたエピソードは今も語り草である。

最初の11年W杯招致は3票差でニュージーランドの壁に阻まれたが、親しい理事から「ネクスト、ノビー」と励まされた。W杯招致委員長として雪辱を期した2度目の挑戦で19年大会を勝ち取った。本人はチーム全体の勝利と強調したが、眞下流の突破力と交渉術が実を結んだ成果でもあった。「無謀な夢」が現実になった瞬間、シド・ミラーIRB前会長から投げかけられたのが「10年やるから日本ラグビーを底上げしろ!」という重みのある一言だった。日本ラグビー協会の改革にも取り組み、競技の活性化と強化を目指して03年9月に「トップリーグ」(現リーグワン)を創設。初代チェアマンとして開幕を宣言した。次世代への思いは熱く、いつか日本が世界のラグビーのリーダーになる日が来ることを願っていた。

バンカラ気質で開拓精神を育んだ高崎高校時代の人脈も大切に「黒潮会」と名付けられた同窓会の宴席では、定期的に政財界の著名OBも参加して昔話に花を咲かせたものだ。そんな壁を越えた人脈づくりが、W杯日本初開催につながったと確信している。私も編集に協力して24年7月に出版された「ラグビーと生きる ノビーと呼ばれた男のW杯招致回顧録」(眞下昇著・創文企画)が惜しくも遺作となった。



共同通信記者 田村 崇仁 様



眞下さんとの思い出

眞下さんのご逝去に際して心よりお悔やみ申し上げます。

レフェリー眞下さんの学生の試合のレフェリングは、選手の名前を記憶することから始まり、試合前後、試合中の選手との対話を心掛けられておりました。

また、ラグビーのルールに則り正確なジャッジを常に心がけることはもとより、試合中に反則の発生を予期し、それを起こさないように選手との対話を心がけられておられました。これらの対話は、ラグビーに対する深い造詣と愛情から生まれ、記録に残らずとも、眞下さんが遺された大きな足跡と信じております。

公益財団法人日本スポーツ協会 会長 遠藤 利明 様

眞下さんのご逝去を心よりお悔やみ申し上げます。

ラグビーワールドカップ大会の日本招致に向けて、眞下さんと一緒に活動したことがつい先日のように思えます。

日本の子供たちが世界の迫力あるプレーを見られること、ラグビーにおいて勝敗よりも大切と言われるスピリットを感じてもらえることが、私と眞下さんの共通の願いでした。

招致成功に至るまで様々な困難がありましたが、眞下さんの実直な取り組みを目の当たりにし、共に活動できたことは、私の大きな誇りです。

元日本ラグビーフットボール協会 会長 森 喜朗 様

It was with profound sadness that I learned of Noburu's passing in April. Affectionately known across the rugby world as 'Nobby', he was far more than an administrator - he was a visionary, a tireless advocate, and a true pioneer in the global growth of our game. Nobby's legacy is etched not only in the rise of Japan and Asia on the world rugby stage, but also in the strong relationships he forged through his warmth, wisdom, and passion.

I will always remember Nobby as a man of boundless optimism, integrity, and grace. He was a gentleman in every sense. I can still picture the radiant joy on his face when in 2009 Japan was awarded the hosting rights to the men's Rugby World Cup 2019. It remains one of the most celebrated decisions in rugby's history, in no small part because the dedication of Nobby and others in making a dream a reality.

Japan, and the entire rugby community, owe Nobby a debt of gratitude. His contribution was immense and his impact enduring. Nobby will forever remain in our hearts - a symbol of what is possible when passion meets purpose.

Tribute by Sir Bill Beaumont

4月に舞い込んだ昇さんの訃報は深い悲しみでした。ラグビー界において広く「ノビー」の愛称で親しまれた彼は、運営者の粋をはるか超え、ラグビーが国際的に発展していく中で先見の明を持ち、労を厭わず提唱を続けた真のパイオニアでした。ノビーのレガシーは、世界のラグビーシーンに、日本やアジアの存在だけでなく、彼がその人情と知恵と情熱をもって培った強い関係性を刻み残してくれました。

私は、無限のポジティブ主義者にして高潔、品格ある立ち振る舞いも見せた男、ノビーを忘れません。彼は、あらゆる点で紳士でした。2009年、ラグビーワールドカップ2019年大会の日本開催が決まった時の喜びに輝いた彼の顔は、今でも鮮明に覚えています。ノビー達による夢の実現に向けた献身があったからこそ、あの決定はラグビーの歴史において最も祝されるべき出来事だったと思います。

日本、そして、ラグビー界全体として、感謝すべき恩恵をノビーから受けています。彼の貢献の大きさは計り知れず、その影響力は不朽です。ノビーは、情熱と目標が合致した時に人が成し得ることのシンボルとして、私たちの心の中に生き続けるでしょう。

(元ワールドラグビー会長) ビル・ボーモン ト卿による追悼